神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The rhetoric of contest speech : logos, pathos, ethos and audience involvement

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2013-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 野村, 和宏, Nomura, Kazuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1513

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

コンテストスピーチのレトリック
—Logos, Pathos, Ethos と Audience Involvement[1]

野村　和宏

1. はじめに

人前で言葉をもって語るとき、それは教師による授業であれ政治家による演説であれ、さらには落語などの話芸であれ、それぞれある特定の話題についてまとまりのある内容を複数の聴衆に向かって話をするという観点では、いわゆるパブリック・スピーチである。そこには人間の行う意志的活動として明確な目的が存在する。

このスピーチの目的については野村（2002: 14-15、2011: 118-119）でも述べたが、主に説得を目的とした Persuasive Speech、情報を与えることを目的とした Informative Speech、聴衆を楽しませることを目的とした Entertaining Speech、聴衆に行動を促すための Motivational Speech、あるいは実際に演じて見せる Demonstration Speech などに分けられ、1 つのスピーチの中でこれらの複数の目的が同時に達成されることも当然起こりえる。授業であればまずは学習内容についての新しい知見を教授するという Informative Speech の側面が強く、政治家の演説であれば自らの政策への支持を訴え、さらには投票行動に結びつけるという Persuasive であり同時に Motivational Speech となることが多い。落語やコメディを語る芸人のスピーチは他の何よりもひとえに聴衆を楽しませたい、笑わせたい、という Entertaining Speech であろう。

教育の場においてパブリック・スピーチが発表される機会として、スピーチコンテストがある。このコンテストをただ優劣を競うだけではなく、いかに教育的な活動とするかという課題については野村（2009）で詳しく取り上げたが、この小論ではそうしたコンテストで発表されるスピーチそのものの目的を達成するために特に原稿上どのような方略が用いられているのかを論じる。その分析のための概念として Logos、Pathos、Ethos の視点とレトリックの技法、そしてスピーチへの聴衆の関わりをうながすための audience involvement の観点を中心とする。

1　本論文は大学英語教育学会（JACET）2012年度第51回記念国際大会（愛知県立大学、2012年8月）で英語により口頭発表したものを元に加筆修正を加えたものである。貴重なコメントを寄せてくださった先生方に感謝したい。

2. コンテストでの発表

コンテストで発表するということは自ずとそこには優劣の結果が伴う。しかし、McLean (2003: 227) が What Makes for a “Good” Delivery? というセクション見出しを立てて、いわゆる「良い発表」という場合の「良い」とは一体どういうことなのかという問題提起をしているように、何が良いスピーチか、という問いかけに簡単に答えることは難しい。参加者の間で優劣を競うものとしてはスポーツ競技などがすぐに思い浮かぶが、そこでも明確にタイムで成績を競うものがある一方、体操、シンクロナイズドスイミング、アイススケートのように審査員や審判団が技術点、芸術点をつける競技もある。さらにスピーチコンテストに似たものとして絵画、書道、音楽のように見る人、聴く人の感性に訴える芸術分野においてその出来栄えを競うコンテストもある。こうした競技やコンテストの審査では専門的知識・能力を備えた審査員によるある意味で主観的判断に多くを委ねている。しかし主観的判断といえどもそこには一定の判断基準が確立されていなければならないことは言うまでもない。

2.1　コンテスト審査基準

スピーチ発表という言語活動を「何を」「どう」伝えるかという観点でとらえると、スピーチを構成する要素は Story Message である「内容 (Content)」と Physical Message である「発表 (Delivery)」とに大きく分かれ、その Story Message を聴衆に伝える言語の語彙選択、文法表現、音声表現が「言語 (Language)」である。こうした観点を元にして審査基準が組み立てられることになる。世界的なパブリック・スピーキングとリーダーシップ養成の組織である Toastmasters International[2] のコンテストでは Content に50%、Delivery に30%、Language に20%を配し、さらにそれぞれ具体的な下位項目を設定し、それぞれの項目には Excellent、Very Good、Good、Fair という判断基準とその目安になる得点の範囲を示している。

高校や大学で行われているスピーチコンテストでも主催団体によって審査基準や審査用紙はさまざまである。比較のためにいくつか審査用紙[3]を示す。ど

2　Toastmasters International は1924年に創設されたアメリカのカリフォルニア州に本部を置く Public Speaking と Leadership 養成の組織で、現在は世界的に展開している。その mission には “Toastmasters International helps men and women learn the arts of speaking, listening, and thin king—vital skills that promote self-actualization, enhance leadership potential, foster human understanding, and contribute to the betterment of mankind.” とある。

3　それぞれ筆者が審査委員長として関わっているコンテストの審査用紙である。用紙の下半分にスペースを設け、審査員がコメントを記入し、切り離して発表者に手渡すようにしているものもある。こうしたフィードバックは望ましいものである。

のようなメッセージを組み立てるかという観点で内容に対する評価項目に注目すると、図 1 では内容に50%を配した上で独創性と構成に振り分け 5 項目の観点を設けている。図 2 は内容に40%を与え、トピックの選択、構成、独創性、説得力と 4 項目で評価している。図 3 は内容に50%を与え、論を支える Support Material や Discussion という項目と発表内容が聴衆にとって意味のあるものであるかの Speech Value to the Audience という項目が注目される[4]。

Judging sheet for Speech　　*Group*_____

No.	Title:		Name	Ms. Mr.		*Sub total*
English (30)	Fluency		10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
	Diction		10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
	Grammar		10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
Contents (50)	Originality (30)	significance	10	2 4 6 8 10		
		timeliness	10	2 4 6 8 10		
		Appeal to Audience	10	2 4 6 8 10		
	Organization (20)	Effectiveness	10	2 4 6 8 10		
		Logical, clear, well-discussed development	10	2 4 6 8 10		
Delivery (20)	Vocal Quality		10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
	Body Language		10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
					Total Score ⇒	

図 1

No.　Title　Speaker's Name

Category	Evaluation		Subtotal	Total
Content 40	Choice of Topic	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Organization	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Analysis/Creativity	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Clarity/Persuasiveness	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
English 30	Grammar/Usage	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Pronunciation	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Rhythm/Intonation	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
Delivery 30	Gesture/Eye Contact/Postur	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Voice/Speed	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1		
	Rapport	5 4 3 2 1		
	Memorization	5 4 3 2 1		

図 2

4　全国高等学校英語スピーチコンテストでも同様に Content に50%が与えられ、残りを English と Delivery で配分するという審査基準を採用している。このように近年は従来よりも内容重視の傾向にある。

Evaluation Sheet

Judge's Name

Order (　　)

Speech Title

Speaker's Name

Category	Evaluation											Subtotal
Content 50	Originality	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Organization / Development	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Support Material / Discussion	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Effectiveness / Persuasiveness	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Speech Value to the Audience	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
English 20	Grammar / Usage / Word Selection	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Pronunciation / Rhythm / Intonation / Fluency	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
Delivery 30	Vocal Quality (Volume / Clarity / Speed / Pause)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Gesture / Eye Contact / Posture	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
	Manner (Confidence / Enthusiasm / Rapport)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	

Signature

Total

図 3

2.2 内容と英語発音のバランス

コンテストで発表されるスピーチの発音は当然ながら評価の対象となる。音楽コンクールにおいて優れたテクニック自体がひとつの芸術表現として存在価値を持つように、努力して達成した極めて優れた英語発音能力は高く評価されるべきものである。単語のアクセント位置や母音子音の決定的な間違いは、不自然なジェスチャーなどと同じく、聴衆の注意をその部分に不用意に引きつけてしまうことになるためである。また高いレベルで競うコンテストであればあるほど、pronunciation と区別した意味での articulation、つまり子音や母音を明晰に調音し作り出すことが期待される。しかし反対に、いくら発音が見事であっても伝えるべき内容が弱いスピーチ[5] では、かえって優れた発音が一人歩きして目立ってしまうことになる。そうした観点からもコンテストスピーチで求められるのは、まずは発表者と聴衆の双方にとって意味のある内容と十分に練り上げた原稿であることはいうまでもない。本論文では原稿内容に焦点を当て、発音とデリバリーに関しては稿を改めて論じたい。

5　全国高等学校英語スピーチコンテスト審査委員長の鳥飼玖美子氏（立教大学）は、全国大会に進むほどの生徒の英語であれば十分に intelligible であり、より内容の論理構成に力を入れる必要性を審査員コメントで強調している。(2011年度第 5 回コンテスト、筆者による録画ビデオより)

3．スピーチのメッセージの構成

スピーチ自体の目的については既に述べたが、スピーチコンテストという場を考えた場合、単に新しい情報を伝える、あるいは聴衆を楽しませる、といったことが主要な目的になることは少なく、やはり聴衆に何かを訴えかけることにより聴衆の価値観や行動の変化をうながす、つまり聴き手を Persuade あるいは Motivate することが主な目的と考えられる。このことは審査項目の中に特に楽しませることに関する評価項目がない一方、“Persuasiveness” “Significance” “Speech Value”といった語句が並んでいることからもうかがえる。Persuade は辞書によれば “to make someone decide to do something, especially by giving them reasons why they should do it, or asking them many times to do it”[6]、あるいは “to make sb believe that sth is true”[7] とあるように、説得が成功すれば相手の行動に何らかの変化が生じる。Dale and Wolf (2006: 119) も “Any speech is persuasive if its purpose is to convince others to change their feelings, beliefs, or behavior.” と相手の感情や信念や行動に変化をもたらすことであるとし、さらに続けて “When do we make persuasive speeches? We make them all the time. When we ask a friend to lend us money, ask our teacher for a higher grade, try to convince a sibling to lose some weight, or try to persuade a parent to buy us something, our goal is to try to change or influence others.” と述べて persuasive speech が特別なものではなく実は日常的に行われていることを指摘している。こうした日常会話のような少人数の相手に対してではなく、多数の聴衆を前に行うパブリック・スピーキングで説得力を持たせるためにはどのような観点で構成すればよいかを検討する。

3.1　Logos、Pathos、Ethos

Aristotle は *The Art of Rhetoric* で “Of those proofs that are furnished through the speech there are three kinds. Some reside in the character of the speaker, some in a certain disposition of the audience and some in the speech itself.” (translated by Lawson-Tancred, 1991: 74) と述べ、弁論における説得には「論者の人柄」「聴き手の心の状態」「言論そのもの」の 3 つの要素が重要であることを示している。このアリストテレスの主張は現代においても十分に通用するものであり、パブリック・スピーキングについて論じる Brody (1998: 52-53)、Grice and Skinner (2007: 323-324)、Lucas (2007: 434-465)、McLean (2003: 232)、Miculka (1999: 186-188)、Tim (2000: 87-88) などは、説得力のある発表を行う

6　*Longman Dictionary of Contemporary English*, 4th edition.
7　*Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 7th edition.

ための重要な要素として Logos、Pathos、Ethos の 3 つの要素を挙げている。McLean（2003: 232）ではそれぞれの要素を次のように説明する。

Logos is an appeal based on logic or reason. Speeches involving scientific information or processes by companies, corporations, or universities are often logos driven. Logos involves the internal consistency of the message, or how well it fits together. As a speaker, you should establish a logical sequence and establish the credibility of your sources, appealing to authority.

Pathos is an appeal based on emotions. Advertisements, for example, are often pathos driven. Pathos involves an appeal to the audience's sympathies, imagination, and a sense of common experience. An effective appeal to pathos causes an audience not just to respond emotionally but to actually identify with the speaker's point of view, seeing things through the speaker's eyes. As a speaker, you should establish your enthusiasm, establish your concern, use vivid language, and help audience paint a mental picture of what it must be like.

Ethos is an appeal based on character of the speaker. An ethos-driven speech relies on the reputation of the speaker. Ethos refers to the trustworthiness or credibility of the speaker. Ethos is often communicated through the tone of voice, eye contact, and style of speaking. It can also be affected by the speaker's reputation apart from the speech, involving his or her expertise in their field, previous record, education, or integrity. As a speaker, you should establish your competence, establish your trustworthiness, and establish your sense of common values.

また Miculka（1999: 186-188）は Ethos に属する概念を具体的に加えている。

Logos（Logical Appeal）
Pathos（Emotional Appeal）
Ethos（Speaker Appeal）
　Competence（Expertise, Credibility）
　Trustworthiness
　Enthusiasm
　Poise

Logos は論点を整理し信頼できるデータや資料の裏付けを与えながら論理的に話を進めるという「構成的要素」、Pathos は聴衆の感情に共感を与え話し手の視点を共有していくという「感情的要素」、Ethos は専門的知識、信頼性、熱意、そして時には既に確立した名声や評判など話し手自身に関わる「人格的要素」ということになる。戸塚（1992: 520）はアリストテレス『弁論術』の解説で「説得には、それを生み出すもとが何かに応じて三つのものが考えられる。すなわち、(1) 論者の人柄による説得、(2) 聴き手の心を或る状態にすることによる説得、(3) 言論そのものによる説得、である。」と述べているが、それぞれが Ethos、Pathos、Logos に相当する。コンテストでの発表を考えた場合、スピーチの導入、本論、結論といった構成、論理展開、信頼できるデータや資料は Logos の領域、自らの主張を聴衆の共感を誘いながら訴えるためのエピソードや経験談は Pathos の領域、そして話す内容のもつ信頼性、話し手の誠実さ、話し手の熱意は Ethos の領域となる。[8]

スピーチの原稿を作成する段階で、自分の伝えようとしているメッセージが発表者自身にとってだけでなく、そのスピーチを会場で聞いてくれる聴衆にとっても意味があるかどうかを問うことが大切である。独自性を高めるために他の誰でもない自分自身の経験を語ることはよくあることだが、こういうことをしたとか、こんなことがあった、と述べるだけでは聴衆にとって意味のあるメッセージになりえないことがある。その経験が一般的にはどういう意味をもつのか、また他の人にも当てはまる意味のある教訓は何なのかなど、聴衆が共有するための手がかりを加えることで自分の経験を述べることが生きてくる。

また一方で、コンテストスピーチの中には、日本はこうあるべきだとか、環境問題はこうしなければいけないといったように、まるで新聞の社説そのものを聞くような発表もある。確かに社会問題や国際問題などについて真剣に考えているというメッセージは伝わり、聴衆にとっても同時に共有すべき大切な問題であることは理解できるが、特に議論を呼ぶような大きな話題を扱う場合には、自らの立場を一方的に主張し続けるのではなく、相反する立場の意見も織り交ぜ、両方の立場を理解した上で、やはり自分はこうだと思う、自分の経験

8　佐々木（2011）は日本の政治家について「今、国民を心から納得させ得る政治家がいない。なぜか。簡単です。演説が、文章が、ヘタだからです。演説する術を古代ギリシャではレトリケーと言いました。（中略）堂々たる雄弁によって精密に根拠を示し、民衆の納得と同意を獲得する技芸。われわれが失っているのは、この真の意味でのレトリケーなのです。」と指摘し、雄弁の技芸の必要性を説いている。ここでの「堂々たる雄弁」は Ethos、「精密に根拠を示す」は Logos の領域である。また渋谷（2011）は「政治家が官僚が書いた答弁を棒読みするような生気のない言葉とは対極にある、生々しい、体温が伝わってくる言葉」を「肉体性のある言葉」と称し、そのような言葉が求められていると論じている。ここでの「体温」「肉体性」は Pathos につながる。

からもそうだ、聴衆にとってもそうではないだろうか、そして自分はこのように行動していきたい、というように展開することで聴衆としても共感しやすくなる。

このように Specific で Personal なエピソードと General で Social / Global な視点は、ある意味では Pathos 的要素と Logos 的要素の観点でとらえることも可能で、両者のバランスに配慮してスピーチを構成することで、より多くの聴衆に訴えかけることにつながる。アリストテレスは弁論術を優れた意味での技術として意味づけるのは Logos による説得であるとしながらも、Pathos と Ethos による説得の現実的効果にも注目し、感情や人柄について多くのページを割いている。この点について戸塚（1992: 521）は「この種の説得による場合も、無計画にただ偶然の結果を期待するというのではなく、感情や人柄についての精確な分析に基づき、それぞれに適合する有効な語り方として方法化されたものでなければならない。」としている。

これらの要素の具体的な例を有名なスピーチから示す。まず Logos であるが、ブッシュ大統領第 2 期就任演説[9] では ownership society の構築に触れ、その定義を続けているくだりがある。“ …, we will bring the highest standards to our schools, and build *an ownership society*. We will widen the ownership of homes and businesses, retirement savings and health insurance ― preparing our people for the challenges of life in a free society. By making every citizen an agent of his or her own destiny, we will give our fellow Americans greater freedom from want and fear, and make our society more prosperous and just and equal.” 政策を述べることに加えて分かりやすくその意味するところを続けるというこうした例の他、信頼できる資料や著名な名句の引用なども Logos の領域となる。

次に Pathos の例として、クリントン大統領が初めて大統領候補に指名された際に行った指名受諾演説[10] の一節を示す。

I never met my father. He was killed in a car wreck on a rainy road three months before I was born, driving from Chicago to Arkansas to see my mother. After that, my mother had to support us. I can still see her clearly tonight, through the eyes of a three-year-old, kneeling at the railroad station and weeping as she put me back on the train to Arkansas.（中略）Thank you mother, I love

---

9　George Bush（43rd President）Second Inaugural Address on Jan. 20, 2005

10　Bill Clinton（42nd President）Acceptance Speech on July 16, 1992 at Democratic National Convention

you.

政治家としての自分を聴衆によく知ってもらうために、いかに自分の母親が苦労して自分を育ててくれたか、そういう女性への医療保険の必要性も含めて述べたのがこの部分である。「自分の父親に会ったことがない」「自分が生まれる前に自動車事故で亡くなった」と始める部分は個人的な経験としては重いもので、その後に続く具体的な情景描写と共に聴衆の心をとらえる。そして段落の最後で党大会の会場にいる母親を "she" ではなく "you" と人称をシフトさせることでそれまでの客観描写的記述から個人的感情を表出した。[11] クリントン氏はこうした「見える」描写に長けており、第一期就任演説[12] の中でも "Our founders saw themselves in the light of posterity. We can do no less. Anyone who has ever watched a child's eyes wander into sleep knows what posterity is." と述べ、幼児の安らかに眠りに落ちる目という例えで聴衆の心に訴えかけている。

次に Ethos の例を示す。スペースシャトル・チャレンジャーの事故の後、レーガン大統領が国民に向けて行ったスピーチ[13] は American Rhetoric のサイトでトップ100のスピーチの第 8 位に選ばれている感動的なものである。既に大統領の地位や立場という意味での Ethos は十分に確立しているわけだが、この悲劇に際して "Nancy and I are pained to the core by the tragedy of the shuttle Challenger. We know we share this pain with all of the people of our country. This is truly a national loss." や "I want to add that I wish I could talk to every man and woman who works for NASA, or who worked on this mission and tell them: Your dedication and professionalism have moved and impressed us for decades. And we know of your anguish. We share it." と述べるくだりなどは個人として、また国民を代表してその思いを伝えており、話し手の人柄が浮かび上がる場面である。

以上、Logos、Pathos、Ethos の例をいくつか取り上げたが、実際のスピーチには McLean (2003: 231) が "All speeches combine at some level all three elements." と述べているように、自然と話し手の人間性や人柄が表れ、話の展

11　日本での類似の例として、民主党代表を選出する両院議員総会で新代表に選出された前原誠司氏は投票前の演説の中で個人的な話だが、と前置きした後「私は中 2 のときに父親を亡くしました。(中略) 母親はいままで家にいたのに、一生懸命外に出て働いて、我々を養ってくれました。それについては感謝しています。」と述べた。当日の投票結果は菅直人候補が94票、前原誠司候補が96票とその差 2 票であり、この Pathos による訴えが票に影響した可能性は否定できない。

12　Bill Clinton (42nd President) First Inaugural Address on Jon 20, 1993

13　Ronald Reagan (40th President) Spaceship "Challenger" Disaster Speech on Jan. 28, 1986

開や具体例の示し方、共感できるエピソードへの言及などを含めて考えると、Logos、Pathos、Ethos の複数の要素が組み合わされていることが多い。

3.2 聴衆の関わりをうながすレトリック技法

原稿を書く上で注意すべき点は、スピーチは聴衆が耳で聞いて理解するものであることを忘れないということである。そのためには難解な語句や表現を用いず、聴衆の耳に優しい表現を使いたい。こうした聴衆への配慮は、どれだけ自分の言葉を理解して身を乗り出して聞いてもらうことができるかにつながってくる。自分の与えられた短い時間と空間を聴衆と共有するためには、聴衆の関わり（audience involvement）をうながす方略が大切となってくる。Dowis（2000: 100）はスピーチ原稿作成にあたり次の11項目の助言を示している。

1. Be yourself.
2. Talk with, not to or at, the audience.
3. Don’t hesitate to use personal references.
4. Use strong, active verbs and vivid nouns.
5. Prefer the active to the passive voice.
6. Use specific, concrete language.
7. Use jargon sparingly, if at all.
8. Be aware of word connotations that go beyond their actual meanings.
9. Set the right tone for your speech.
10. Get to the point.
11. Follow the rules.

ここで示された項目からは、自分らしく語り、聴衆とストーリーを共有する、生き生きと具体的に表現することなど、原稿作成に役立つヒントがいくつも得られる。

続いてスピーチに生かすことのできるレトリック技法[14] について述べる。Collins（2001）、Dowis（2000）、Eidenmuler（2008）、Lester（2009）、Lucas（2007）を参考にスピーチに応用できる代表的なものを列挙する。

14　三熊（2002: 54-55）は「純粋なスピーチ理論における修辞（Style）は、スタイル（文体）のことであり、歴史上この部分が修辞学の全容として捉えられていた時期があるため「レトリック」という名称にネガティブな意味合いが付与されてしまったという、いわくつきの領域である。」と述べ、スピーチ理論におけるレトリックの概念を正している。

Alliteration, Rhyming
Anaphora, Repetition
Antithesis
Inclusive Language
Metaphor, Simile
Rhetorical Question
Triad, The "rule of three," Triplicate Asyndeton

3.2.1 Alliteration、Rhyming

Alliteration は「頭韻」、Rhyming は「押韻」でこれらはスピーチにリズムを与える。レーガン元大統領は就任演説[15] で "Well, this administration's objective will be a healthy, vigorous, growing economy that provides equal opportunity for all Americans, with no *barriers born of bigotry* or discrimination." と[b]の音で始まる語を並べている。またクリントン元大統領は就任演説[16] で開始早々に "Communication and commerce are *global*; investment is *mobile*; technology is almost *magical*; and ambition for a better life is now *universal*." と[l]の響きで終わる形容詞を並べた。こうした音は聴き手の耳に残り心地よいリズムを作り出すものである。

3.2.2 Anaphora、Repetition

Anaphora あるいは Repetition は「(首句) 反復」で、2 つの句や節を併置した Parallelism「並立法」や後述する Triad の形で用いられることがあるが、スピーチ全体にわたり何度も繰り返すこともある。キング牧師の "I have a dream." の繰り返しはよく知られた例である。またクリントン大統領は第 2 期目に向けた民主党大会での指名受諾演説[17] で "We are on the right track to the 21st century." という表現を 5 回、"build a bridge to the 21st century" を15回繰り返している。この演説は合計7,064語で45分を超える長大なものであったが、その中で適度な間隔を置いて繰り返されたこれらの句は聴衆の耳に残った。

3.2.3 Antithesis

Antithesis は「対照法」で、Dowis (2000: 123) によれば相対する概念を併置

---

15 Ronald Reagan (40th President) First Inaugural Address on Jan. 20, 1981
16 Bill Clinton (42nd President) First Inaugural Address on Jan. 20, 1993
17 Bill Clinton (42nd President) Acceptance Speech on Aug. 29, 1996 at Democratic National Convention.

することで強調する働きがある。リンカーン大統領のゲティスバーグ演説[18]では例えば "… that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain, — that this nation, under God, shall have a new birth of freedom — and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth." に見られるように「命を捧げた者」と「滅びることのない永遠の政治」を対比している。

この演説の背景について Wills (1993、北沢訳: 56) は「思想と語句の釣り合いは目からも耳からも簡単にたどることができ、往時と現在、誕生と死、生者と死者という対比に見られるように、対照法の使用は明らかである。」という Cooper (*Rhetoric of Aristotle*, p.xxxiii) の言葉を引用している。[19] またケネディ元大統領の就任演説[20] における有名な "And so, my fellow Americans: *ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country."* はこの対照法の好例である。MacArthur (1995: xix) によればこのフレーズは選挙キャンペーンでは "We do not campaign stressing what our country is going to do for us as people. We stress what we can do for our country, all of us." であった。この表現と就任演説の表現を比べてみれば、この歴史に残る名演説に果たす Antithesis の技法の効果がうかがえる。またオバマ大統領が2004年の党大会で行った基調演説[21] の "*There's not* a liberal America and a conservative America; *there's* the United States of America. *There's not* a black America and white America and Latino America and Asian America; *there's* the United States of America." も Antithesis の好例で、たたみかけるような力感を持って語られたこの一節は強い印象を残し、オバマ氏という政治家の存在を広く知らしめることとなった。

3.2.4 Inclusive Language

Inclusive Language は「聴衆を巻き込むための言語表現」である。[22] これは特にスピーチの場に居合わせた人々を指す文の主語として I、You、We のどれを用いるかにも関わるもので、オバマ大統領が選挙運動中に用いた有名な "Yes,

---

18　Abraham Lincoln Gettysburg Address. Nov. 19, 1863

19　Cmiel (1990: 117-118) も "The power of Lincoln's eloquence begins with his cadence, not vocabulary. Strategic repetition, antithesis, and parallelism lend mood far more than lofty diction. … In the end, of course, Lincoln's rhetoric succeeded because he could bring it all together." とリンカーンのレトリックについて述べている。

20　John F. Kennedy (35th President) Inaugural Address on Jan. 20, 1961

21　Barack Obama (44th President) Keynote Address on July 4, 2004 at Democratic National Convention.

22　Inclusive language には「性差のない包括用語」という意味もある。(『ジーニアス英和大事典』)

we can.” のフレーズに見られるように会場の聴衆も包括する意味での We をうまく使えば聴衆との一体感を表現することができる。国連総会で行った演説[23] でも、you が 7 回であったのに対し、アメリカ国民のみならず総会に出席した国々や全世界の市民に向け we を128回、our を64回用いたことからも audience involvement をうまく創出していることが分かる。第 2 期目に向けた2012年夏の党大会での指名受諾演説[24] では you を81回（your 8 回）、we を101回（our 58回）用いた。たとえば “And now *you* have a choice: *We* can give more tax breaks to corporations that shift jobs overseas or *we* can start rewarding companies that open new plants and train new workers and create new jobs here in the United States of America. *We* can help big factories and small businesses double their exports. And if we choose this path, *we* can create a million new manufacturing jobs in the next four years. *You* can make that happen. *You* can choose that future.” のように、自らと会場に集う聴衆を一体化するための表現と一定の距離を置くための表現を使い分けているのが分かる。こうした話者との距離感や一体感を示す例として、高校生のコンテスト原稿の中に、母親と距離を感じていたが、そのわだかまりを乗り越えて母への心からの思いを語ったものがあった。途中まで母のことを三人称の “she” で客観的視点から述べていたのが、最後の段落で “you” に切り替わる。本番の発表では声のトーンや速度の変化、適度なポーズもなく単調な発表となったのが惜しまれるが、原稿では第三者的描写からまさに目の前の母への思いを観客の前でステージ上に再現するという見事な展開がなされていた。この “she” から “you” への人称代名詞のモード変換は故ダイアナ王妃の葬儀の際に弟であったスペンサー伯爵が行った追悼演説[25] でも見られた。

> “*She* would want us today to pledge ourselves to protecting her beloved boys William and Harry from a similar fate and I do this here, *Diana*, on *your* behalf. We will not allow them to suffer the anguish that used regularly to drive *you* to tearful despair. And beyond that, on behalf of *your* mother and sisters, I pledge that we, *your* blood family, will do all we can to continue the imaginative and loving way in which *you* were steering these two exceptional young

---

23　Barack Obama（44th President）Address on Sept. 23, 2009 at United Nations General Assembly

24　Barack Obama（44th President）Acceptance Speech on Sept. 6, 2012 at Democratic National Convention.

25　Earl Spencer’s Eulogy to Diana delivered at Westminster Abbey on September 6, 1997

men, so that their souls are not simply immersed by duty and tradition, but can sing openly as *you* planned.（中略）But we, like *you*, recognize the need for them to experience as many different aspects of life as possible to arm them spiritually and emotionally for the years ahead. I know *you* would have expected nothing less from us.”

それまでダイアナ妃について she で語り続けていたのが、William と Harry の 2 人の息子の話となり、Diana と名前で呼びかけたことをきっかけとして she が you に転換する。実際にこの部分ではスペンサー伯爵の声にも震えが聞かれるなど感情が高ぶっているのが分かる。聴衆は共に Diana を 2 人称として話し手の視点を共有することになる。このように人称代名詞を使い分けることで話し手は聴衆との関わりや距離感をコントロールすることが可能となる。

3.2.5 Metaphor、Simile

Metaphor と Simile は「比喩（暗喩）」と「直喩」である。Metaphor として、アナン国連事務総長のスピーチ[26] の “With globalization, *the same sea* washes all of humankind. We are all in *the same boat.* There are no *safe islands*. There is no dividing line between “foreign” and “domestic” “infections.” における“sea” と “boat” と “islands” が良い例である。さらにここでは “same” と “safe” に allite ration、“the same sea,” “the same boat,” “no safe islands”という 3 つの句の配置に後述の triad の技法も用いられている。

3.2.6 Rhetorical Question

Rhetorical Question「修辞疑問」は強意の反語表現としてよく知られている。レーガン大統領[27] は “From time to time we’ve been tempted to believe that society has become too complex to be managed by self-rule, that government by an elite group is superior to government for, by, and of the people. But if no one among us is capable of governing himself, then *who among us has the capacity to govern someone else*? All of us together — in and out of government — must bear the burden.” と Rhetorical Question を用いて問いかけ、国民が協力して責任を共有することを説いた。

3.2.7 Triad、The Rule of Three、Triplicate Asyndeton

Triad、あるいは Triplicate Asyndeton は句や節を 3 回繰り返す技法で、繰り

26　Kofi Annan Keynote Address at Global Health Function on June 1, 2001 in Washington.
27　Ronald Reagan（40th President） First Inaugural Address on Jan. 20, 1981

返される要素は基本的に文法上同じ機能を果たす語句、節などで、時には文の単位で繰り返されることさえある。Dowis（2000: 116-117）は “There’s something almost mystical about the number three. It’s as if two are not enough and four are too many. Writers, especially speech writers, have long recognized this phenomenon and often use a rhetorical device called a triad. Or, as some prefer to express it, “the rule of three.”” とこの 2 でもなく 4 でもない 3 という数字の効力について説明している。米国独立宣言[28] に書かれた “We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are *Life, Liberty* and *the pursuit of Happiness*.” の例やリンカーン大統領[29] の “… government *of the people, by the people, for the people*”といった有名な例にも見られるように、古くから好んで用いられ、前項で取り上げたレーガン大統領のスピーチにも明らかにその表現を意識した “government *for*, *by*, and *of the people*” が見られる。他にもクリントン大統領[30] の “*Our hopes, our hearts, our hands*, are with those on every continent who are building democracy and freedom.” のように簡単に例は見つかる。Dowis（2000: 119）はこうした triad の効果としてさらに “… in summary, well-constructed triads add drama, interest, and rhythm to a speech. They also emphasize important points and make them stick in the minds of listeners.” と述べて結んでいる。

以上、スピーチにおける主なレトリック技法を概括した。当然のことながら多くの種類を用いればよいというものではなく、使い方には配慮が必要である。Lester（2009: 44）が “Beware of using too many, in case your message becomes too complicated by the many ways you are putting it across, but also absolutely beware of not using them at all. … They will also help you end in a way that sends your message home in a memorable way.” と述べているように、バランスも考えながらうまく組み込んでいくことで聴衆に対して印象深くメッセージを伝えることが可能となるのである。

４．コンテストスピーチの分析

筆者はこれまでスピーチコンテストにコンテスタント、実行委員長、あるいは審査員とさまざまな形で関わり[31]、多くのスピーチを耳にしてきた。2006年から2011年度の間には審査員あるいは聴衆として合計365本のスピーチを聴い

28　The Declaration of Independence In Congress, July 4, 1776.
29　Abraham Lincoln Gettysburg Address, Nov. 19, 1863.
30　Bill Clinton（42nd President）First Inaugural Address on Jan. 20, 1993

た。聴衆と共有した空間と時間の中で展開されたそれらのスピーチには素晴らしい感動を与えるものが多くみられたが、その中でも特にメッセージ、原稿の構成、発表の仕方などあらゆる点で印象的であった “Look Beyond the Image” と題したスピーチ原稿[32] を取り上げてその分析を行いたい。このスピーチは総語数が625語であり、コンテストの 5 分30秒という制限時間に対して平均 1 分間約107語となっており、多すぎず少なすぎずコンテストでの発表として妥当な語数[33] である。

4.1 Title and Introduction

このスピーチのタイトル “Look Beyond the Image” からは先入観を超えて物事を見るようにといったメッセージをある程度予測することはできるが、具体的な内容までは想像できない。Roman and Raphaelson（1992: 100）が “An interesting title can create that sense of pleasurable anticipation.” と述べているように、こういったタイトルは聴衆に期待感を持たせる効果がある。スピーチは場面設定から始まる。

> *Seven years ago I went to my first homeless soup kitchen*, run by the Catholic Social Action Center in Kobe or SAC for short. That's when I first met *people* who are called homeless. I was very young, so I didn't know about their situation then, but I remember thinking that they looked a bit dirty.

31　コンテスタントとしては Toastmasters Club Contest、Toastmasters Area Contest、All-Japan Toastmasters Speech Contest、ジャパンタイムズ英語レシテーションコンテストなどに参加した。また審査員あるいは審査委員長としては、近畿地区短期大学英語スピーチコンテスト、流通科学大学スピーチコンテスト、東西六大学英語弁論大会、三田市国際交流協会英語スピーチコンテスト、兵庫県高校生英語スピーチコンテスト、大阪府高等学校英語暗唱弁論大会、近畿地区高専英語プレゼンテーションコンテスト、山陽学園大学上代杯争奪スピーチコンテスト、神戸大学英語プレゼンテーションコンテストなどである。近畿高等学校英語スピーチコンテスト、全国高等学校英語スピーチコンテストには聴衆として毎回参加し、全スピーチを聴いている。

32　このスピーチは兵庫県立国際高校の森本小夏さんの作品。2011年度の兵庫県高校生英語スピーチコンテストに阪神地区代表として出場して優勝、兵庫県代表として近畿高等学校英語スピーチコンテストに進み再度優勝、近畿地区代表として全国高等学校英語スピーチコンテストに出場し、全国 9 ブロックからの代表18名の参加者の中で第 5 位になった。原稿の全文は Appendix　1 に掲載した。筆者は兵庫県大会の審査委員長を務め、近畿大会、全国大会は聴衆としてその発表を聴いた。

33　これまでに兵庫県大会で上位 5 位までに入賞した発表者の原稿の文字数平均は、2007年度629語、2008年度596語、2009年度564語、2010年度567語、2011年度612語であり、また2008年度から2011年度の 5 年間の第 1 位優勝者の平均語数は607語である。

この部分で話者が最初にホームレスの人々に出会った状況を、聴衆は映像として理解する。ここではまず相手のことを “people” を用いて述べることで客観的な距離感を示し、彼らを “a bit dirty” と表すことにより当時の率直な気持ちを表現している。続けてスピーチは聴衆に疑問を投げかける。

> *What is your image of homeless people*? A lot of people seem to have a *stereotype image* of them as being *smelly, dirty, lazy, scary* people, who have no shelter. I wondered if this is what they are really like.

多くの聴衆に一斉に問いを投げかけても聴衆から具体的な答えを求めるわけではない。しかし質問を受けると自然に自分の内で答えようとするものである。この想定される答をまとめる形で、ステレオタイプ的なイメージであると断りながらも、“smelly”、“dirty”、“lazy”、“scary”という全て[i]という音で終わる短い形容詞でリズムを与え（rhyming）、それらの語の皮膚感覚的な意味で聴衆の感情を動かし始める（Pathos）。ここまでが Introduction の段落である。この導入部の構成は明確で分かりやすい。

4.2 Body

次の Body に入る段落ではまず信頼できるデータを用いることで内容の説得力を高めようとする（Logos）。データの出展は政府資料でありその年号も示される。さらに具体的な細かい数字が表現される。これらは about …と概数とすることも可能だが、ここで見られるように敢えて正確に述べることで信憑性を高める効果がある。[34] 当然ながらこうした数字は文脈の中では新情報であり、より明確な発音が求められる。

> *Government estimates in 2011* show that there are *10,890* homeless people living in Japan, but this number does not include the growing number of “net caf? refugees.” People become homeless for many different reasons. According to research done by SAC, *56* percent lost their job, *16* percent were injured or too old to work and *28* percent for other reasons, like nowhere to go after coming out of hospital or drinking and family problems.

34　Roman and Raphaelson（1992: 13）は “Our adult program was a great success. We attracted more students from more places than before.” と曖昧にするのではなく “Our enrollment doubled to 560. Students came from Wyoming and 27 other states, and from Germany and Canada.” と具体的に書くことを勧めている。

続く部分では Mrs. Yamano という女性の名前が出る。この人物自身が一般的に著名な人物ではないため、名前を出すこと自体が聴衆にとって大きな意味を持つわけではないが、a lady とすることに比べるとよりリアリティが増すという効果がある。

I wondered why the homeless don't stay with their family. *Mrs. Yamano* from SAC explained, "in most cases their families have abandoned them." There are valid reasons why people are homeless and it is not because they wanted to be in this situation. It happens and *it is possible* that *we too could become homeless* someday.

そしてこの段落で注目すべきところは最後の文でそれまで用いていなかった we を "we too" という形で用いることで一気に話し手が会場の聴衆を全て巻き込んでいる点である（inclusive language）。その文の "could become homeless someday" という可能性を表す仮定法表現も "it is possible" に導かれて聴衆の気持ちの緊張感を高めている（Pathos）。

4.3 Body - Development 1

次の段落は Body の中で展開部に相当し、具体例を示す部分である。

Many homeless people stay awake *at night* and sleep *during the day*. If we see a homeless person asleep *during the daytime*, we may think that they are lazy. In fact, they feel safer and warmer to sleep in the daytime. *At night* they collect other people's recyclable goods to make some money. They are also afraid of being attacked at night so they sleep *during the day*. Isn't it shocking to find out that people are afraid of being attacked *at night* while sleeping?

ここでは "during the day (time)" と "at night" を対比しながら数回繰り返し、昼と夜という対照法（antithesis）の構図の中で彼らの行動に対する先入観の誤りを指摘し、さらにその事実に対する驚きの気持ちを述べる。

I was even more *shocked* and *angry* when I read about two junior high school students attacking a homeless man in Amagasaki in 2010, because they didn't like this man and wanted to hurt him by setting his tent on fire. They thought that nobody would care if they attacked homeless people. *Why do these things*

happen? Don't they have basic human rights? Do we have prejudice against homeless people?

この部分で話し手は "shocked" "angry"という語により襲撃を行った中学生の理不尽な行動に対してストレートに怒りの感情を表現し、続けてその理由を加えている。さらに "Why do these things happen?" から始まる Rhetorical Question は苛立ちにも似た問いかけとなって聴き手に迫る。聴衆の感情に訴えるという点では Pathos 的アピールであり、こうした問いかけを通して話し手の誠実な人柄が伝わることから Ethos によるアピールと考えられる。質問が 3 つ用いられているのは Triad のレトリック技法である。

4.4 Body - Development 2

話し手はさらに自分の経験を新しいものにする。最近になって再度、SAC を訪ね、そこで体験したことを述べる。ここではかつての最初の訪問の際にいだいた自分の認識と、彼らに対する自分自身の理解の深まりを伝えている。話し手の誠実な人柄（Ethos）が伝わる部分である。段落の最後で表面的には "smelly" で "dirty" ではあるが、実際は "deep down we are all human beings" という認識を得たことを述べる。ここでも "we are all …" を用い、聴衆への語りかけを忘れていない（inclusive language）。

Recently I went to a homeless soup kitchen again, and what I noticed most was that everyone was quite friendly. One man, after the meal, taught my sister how to play a Japanese board game called "igo" and another man entertained us with his magic tricks. I realized that even though these people were *smelly* and *dirty*, *deep down we are all human beings* with the same feelings and social needs.

現状と問題を示した後、どう取り組んで解決できるかを考えるわけだが、住居支援・経済支援といった "government" や "agencies" などの公的機関によるシステムとしての支援に対して、自らの立場に視点を移して "what can we do?" と問いを投げかける（Antithesis）。

I know that the ideal solution may be to *help the homeless find housing and earn some money*. Perhaps there should be more programs run by the *government* and *other agencies* to help them improve their lives, but *what can we do?*

4.5 Conclusion

最後の結論の段落でも “we” や “our” の使用が多い。“Young people like us” と明らかに若者にフォーカスした表現はコンテストの聴衆に同じ世代の人が多いという理由もあるが、基本的に話し手と会場の聴衆全てを巻き込んで展開している（Inclusive Language）。

> I think *we* should be more open-minded and try to understand them and their needs. *Young people like us* can give *our* time, acceptance and even friendship to these people. How *we* think about and treat the homeless may hinder them in improving their lives. One way to eliminate *our* prejudice is to look into and think more about the homeless people issue. If possible, try to attend a homeless soup kitchen, with a friend maybe, and get to know homeless people better. While they may be *dirty* and *smelly*, they are not necessarily *lazy* and *scary*. They are ordinary human beings like *the rest of us*. Prejudice towards the homeless should have no place in *our* society in the future, and it all starts with us making the first move.

注目したいのは導入の段落で用いられた 4 つの形容詞が 2 つのグループに分けられて対照的に使われている点である。外面的な視覚や嗅覚に訴える“dirty” “smelly” に対して、より主観的な判断である “lazy” “scary” の対比はなるほどと思わせるものである（Antithesis）。

この高校生のスピーチは実際に発音やスピード、間の取り方、アイコンタクト、ジェスチャーなども自然で見事なものであったことも高い評価を受けた理由である。しかし特に難解な語彙や表現を用いず、分かりやすい展開で聴衆に訴えかけ、いつの間にか聴衆がそのメッセージに引き込まれていった背景にはさりげなくレトリックの技法を組み込んだこうした練られた原稿が大きな力を果たしていると考えられる。まさに Roman and Raphaelson（1992: 102）が “A great speech is one that inspires the audience to think about a subject from a fresh perspective.” と述べているとおりである。

5. おわりに

スピーチというものは基本的に耳で聴いて理解するもので、最初から聴衆がその原稿を読むことを期待するものではない。その意味からは日本の国会で首相が所信表明演説や施政方針演説を行う際に、議場を埋め尽くした議員が手元に配布された原稿資料を目で追いながら、話す側も原稿を棒読みするという様

子の中継を見るたびに残念な思いをいだく。特に施政方針演説は各省庁から提出される短冊をつなぎ合わせる[35]ことでぎっしりと夕刊一面を埋め尽くすほどの原稿量となることから、どうしても段落の間の取り方などを考える余裕などなく、演説自体が単調な棒読み口調になるのであろう。

一方で、歴代アメリカ大統領就任演説を始めとする歴史的に重要なスピーチでは、その原稿が発表の映像も含め記録され保存され、後世に伝えられ、分析研究の対象ともなっている。このように名スピーチには、そのメッセージを聴衆に余すところなく伝えるためにさまざまなレトリック技法が散りばめられている。

こうした政治の世界のリーダーの演説とコンテストスピーチを同列に置くことはできないが、コンテストで発表されるスピーチはわずか 5 分～ 7 分あまりの限られた制限時間の中で自分のメッセージをしっかりと聴衆に伝えなければならない。聴衆が自分のものとしてそのテーマを共有し、納得し、感動することができるようにするためには、やはり原稿をいかに練り上げたものにするかは大切である。良い原稿であってもまずい発音や発表のために、その意味のあるメッセージが聴衆に十分伝わらないことはあるが、反対に良い発音だけで不十分な原稿を救うことはできない。

そうした意味からもここで示したスピーチのレトリックの観点がスピーチ原稿作成に活かされ、素晴らしいスピーチが力強く語られることを願っている。最後にスピーチコンテストに参加する発表者と指導者が準備から本番までの各段階で大切なことを確認していくためのチェックリスト[36] を Appendix 2 に示した。

参考文献

American Rhetoric Top 100 Speech Ranking. Retrieved Aug. 15, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/top100speechesall.html

Aristotle, (translated with an introduction and notes by H. C. Lawson-Tancred). (1991). *The Art of Rhetoric*. London: Penguin Books.

アリストテレス、戸塚七郎訳. (1992).『弁論術』東京: 岩波書店.

Brody, M. (1998). *Speaking your way to the top — making powerful business*

35　吉崎 (2011: 2) は「各省庁が提出した短冊を、官邸がホッチキスで止めるようにして演説を作成する。首相が独自色を出したいと思ったら、せいぜい最後の「むすび」の部分で工夫をこらすしかない。」としている。

36　このリストは筆者と兵庫県高校生英語スピーチコンテスト実行委員長を務める姫路市立琴丘高校教諭の玉村公一氏によるもので、『はくぼく』第33号、p.64に初出掲載した。

presentations. Boston: Allyn and Bacon.

Cmiel, K. (1990). *Democratic eloquence: The fight over popular speech in nineteenth-century America*. Berkeley: University of California Press.

Collins (2001). *Collins public speaking*. Glasgow: Harper Collins Publishers.

Dale, P. & Wolf, J. C. (2006). *Speech communication made simple*. 3rd edition. New York: Pearson Longman.

Dowis, R. (2000). *The lost art of the great speech: How to write one, how to deliver it*. New York: AMACOM.

Eidenmuller, M. E. (2008). *Great speeches for better speaking*. New York: McGraw Hill.

Grice, G. L. & Skinner, J. F. (2007). *Mastering public speaking*. 6th edition. Boston: Allyn and Bacon.

Lester, A. (2009). *Present for success: a powerful approach to building confidence, developing impact and transforming your presentations*. Singapore: Marshal Cavendish Business.

Lucas, S. (2007). *The art of public speaking*. 9th edition. New York: McGraw-Hill.

MacArthur (ed.) (1995). *The Penguin book of historic speeches*. London: Penguin Books.

McLean, S. (2003). *The basics of speech communication*. Boston: Allyn and Bacon.

Miculka, J. (1999). *Speaking for success*. Ohio: South-Western Educational Publishing.

三熊祥文 (2002).「パブリック・スピーキングの実践と知的昇華」. 大学英語教育学会 (JACET) オーラル・コミュニケーション研究会編『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』東京：三修社.

Montgomery, R. L. (1979). *A master guide to public speaking*. New York: Harper & Row, Publishers.

野村和宏 (2002).「パブリック・スピーキングを構成する要素と授業実践」. 大学英語教育学会 (JACET) オーラル・コミュニケーション研究会編『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』東京：三修社.

野村和宏 (2009).「英語スピーチコンテストの課題 —より教育的な活動とするために」.『神戸外大論叢』第60巻第 5 号.神戸市外国語大学研究会. pp. 1 - 26.

野村和宏 (2011).「マクロタスクに基づくパブリック・スピーキング能力の養

成」.『神戸外大論叢』第62巻第 2 号. 神戸市外国語大学研究会. pp.117-136.
野村和宏、玉村公一（2012）.「英語スピーチの指導」.『はくぼく』第33号. 兵庫県高等学校教育研究会英語部会. pp.54-64.
Roman, K. & Raphaelson, J.（1992）. *Writing that works*. New York: Harper Perennial Books.
佐々木中（2011）.「政治とは「論証」雄弁の技芸が必要」『朝日新聞』（2011年 1 月26日）.
渋谷陽一（2011）.「政治家と言葉」『朝日新聞』（2011年 9 月17日）.
Timm, P. R.（2000）. *The basics: speech communication*. Boston: South-Western Educational Publishing.
Wills, G.（1993）. *Lincoln at Gettysburg: The Words that Remade America*. New York: Simon & Schuster.（北沢栄訳『リンカーンの三分間 ― ゲティスバーグ演説の謎』東京：共同通信社）
吉崎達彦（2011）.「施政方針演説 vs. 一般教書演説」『溜池通信』Vol.461.（2011年1月28日）. Retrieved Sept. 5, 2012 from tameike.net/pdfs8/tame461.PDF.

スピーチテキスト関連

Annan, K.（2001）. Keynote Address. June 1, 2001 at Global Health Function. Retrieved Set. 17, 2012 from http://business.highbeam.com/3548/article-1G1-75202820/kofi-annan-keynote-address-global-health-function.
Bush, G.（2005）. Second Inaugural Address. Jan. 20, 2005. Retrieved Sept. 16, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/speeches/gwbushsecondinaugural.htm.
Clinton, B.（1992）. Acceptance speech. July 16, 1992 at the Democratic National Convention. Retrieved Sept. 2, 2012, from http://www.4president.org/speeches/billclinton1992acceptance.htm.
Clinton, B.（1993）. First Inaugural Address. Jan. 20, 1993. Retrieved Sept. 5, 2012, from http://www.presidency.ucsb.edu/ws/index.php?pid=46366.
Clinton, B.（1996）. Acceptance speech. Aug. 29, 1996 at the Democratic National Convention. Retrieved Sept. 18, 2012, from http://www.pbs.org/newshour/bb/politics/july-dec96/clinton_08-29.html.
Earl Spencer.（1997）. Eulogy to Princess Diana. Sept. 6, 1997 at Westminster Abbey. Retrieved Sept. 4, 2012, from http://www.guardian.co.uk/theguardian/2007/may/04/greatspeeches.

Kennedy, J. F.（1961）. Inaugural Address. Jan. 20, 1961. Retrieved Aug. 26, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/speeches/jfkinaugural.htm.

Lincoln, A.（1863）. Gettysburg Address. Nov. 19, 1863 Retrieved Sept. 20, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/speeches/gettysburgaddress.htm.

Obama, B.（2004）. Keynote Address. July 27, 2004. at the Democratic National Convention. Retrieved July 30, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/speeches/convention2004/barackobama2004dnc.htm.

Obama, B.（2009）. Speech. Sept. 23, 2009. at the United Nations General Assembly Retrieved Nov. 4, 2010 from http://www.americanrhetoric. com/speeches/barackobama/barackobamafirstunitednationsspeech.htm.

Obama（2012）Acceptance Speech. Sept. 2, 2012 at the Democratic National Convention. Retrieved Sept.18, 2012, from http://www.americanrhetoric.com/speeches/convention2012/barackobama2012dnc.htm.

The Declaration of Independence. In Congress, July 4, 1776. Retrieved Sept. 19, 2012 from http://www.archives.gov/exhibits/charters/declaration_transcript.html.

Reagan, R.（1981）. First Inaugural Address. Jan. 20, 1981. Retrieved Aug. 14, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/speeches/ronaldreagandfirstinaugural.html.

Reagan, R.（1986）. Spaceship “Challenger” Disaster Address. Jan. 28, 1986. Retrieved Sept. 20, 2012 from http://www.americanrhetoric.com/speeches/ronaldreaganchallenger.htm

前原誠司 両院議員総会演説.（2005）. 2005年 9 月17日. Retrieved Dec. 4, 2005 from http://www.dpj.or.jp/sub_link/info_mailmag/bk_mailing/vol223_01.html.

森本小夏.（2012）. Look Beyond the Image.『第 5 回全国高等学校英語スピーチコンテスト』発表原稿集. 全国英語教育研究団体連合会.

Appendix 1 スピーチ原稿

Look Beyond the Image

Morimoto Shona

Seven years ago I went to my first homeless soup kitchen, run by the Catholic Social Action Center in Kobe or SAC for short. That's when I first met people who are called homeless. I was very young, so I didn't know about their situation then, but I remember thinking that they looked a bit dirty. What is your image of homeless people? A lot of people seem to have a stereotype image of them as being smelly, dirty, lazy, scary people, who have no shelter. I wondered if this is what they are really like.

Government estimates in 2011 show that there are 10,890 homeless people living in Japan, but this number does not include the growing number of "net caf? refugees." People become homeless for many different reasons. According to research done by SAC, 56 percent lost their job, 16 percent were injured or too old to work and 28 percent for other reasons, like nowhere to go after coming out of hospital or drinking and family problems. I wondered why the homeless don't stay with their family. Mrs. Yamano from SAC explained, "in most cases their families have abandoned them." There are valid reasons why people are homeless and it is not because they wanted to be in this situation. It happens and it is possible that we too could become homeless someday.

Many homeless people stay awake at night and sleep during the day. If we see a homeless person asleep during the daytime, we may think that they are lazy. In fact, they feel safer and warmer to sleep in the daytime. At night they collect other people's recyclable goods to make some money. They are also afraid of being attacked at night so they sleep during the day. Isn't it shocking to find out that people are afraid of being attacked at night while sleeping? I was even more shocked and angry when I read about two junior high school students attacking a homeless man in Amagasaki in 2010, because they didn't like this man and wanted to hurt him by setting his tent on fire. They thought that nobody would care if they attacked homeless people. Why do these things happen? Don'tthey have basic human rights? Do we have prejudice against homeless people?

Recently I went to a homeless soup kitchen again, and what I noticed most was that everyone was quite friendly. One man, after the meal, taught my sister how to play a Japanese board game called "igo" and another man entertained us with his magic tricks. I realized that even though these people were smelly and dirty, deep down we are all human beings with the same feelings and social needs.

I know that the ideal solution may be to help the homeless find housing and earn some money. Perhaps there should be more programs run by the government and other agencies to help them improve their lives, but what can we do?

I think we should be more open-minded and try to understand them and their needs. Young people like us can give our time, acceptance and even friendship to these people. How we think about and treat the homeless may hinder them in improving their lives. One way to eliminate our prejudice is to look into and think more about the homeless people issue. If possible, try to attend a homeless soup kitchen, with a friend maybe, and get to know homeless people better. While they may be dirty and smelly, they are not necessarily lazy and scary. They are ordinary human beings like the rest of us. Prejudice towards the homeless should have no place in our society in the future, and it all starts with us making the first move. (625 words)

Appendix 2 スピーチコンテスト・チェックリスト

Speech Contest Checklist

準備段階

□コンテストへの長い道のりへ向けて取り組んでいく強い気持ちがある。
□他人から与えられるのではなく、自分の中に自分ならではの伝える価値のあるメッセージがある。
□聴衆にも共有できる観点があり、聴衆の興味関心をひきつけることができるメッセージがある。

原稿作成段階

□本論で個人的経験を主に語るのであれば、そこから一般の聴衆にもつながっていく視点が加えられている。
□社会情勢、国際問題などを主に語るのであれば、その主張を支えるための自分自身の経験や視点、行動が加えられている。
□スピーチの Opening はありきたりの表現ではなく、聴衆の興味関心をひきつける工夫がある。
□Introduction、Body、Conclusion の分量のバランスに配慮している。
□Conclusion は聴衆の意識に残りやすいまとめや終わり方を工夫している。
□議論を呼ぶ話題では一方的な意見、主張だけではなく、反対の立場の意見、主張にも触れたり配慮したりしている。
□人称代名詞の I、You、We、(He、She、They)などの使い分けを意識している。
□抽象的な議論だけでなく、聴衆が聞いていて情景が見えてくるようなエピソードや具体例がある。
□文章の時制や直説法、仮定法といった表現に注意している。
□目で読むための原稿ではなく、耳で聞いて分かりやすい原稿にしている。
□複雑すぎる文構造や一文が長すぎる文を多く使っていない。
□借り物の表現ではなく、自分自身が共感できる表現を用いている。
□定められた制限時間に余裕をもって収まる長さの原稿にしている。
□タイトルは自分のスピーチの顔であるため、聴衆の意識に残る魅力的なものを目指す。
□コンテストに応募する際は原稿のレイアウトや段落、単語のスペルなど十分に気を配って作成する。

練習段階

□不安な単語の発音やアクセントなどはきちんと調べて自信を持って発音できる。
□展開の中で、緩急の変化、速度の変化など、全体の見通しがすっきりと描けている。
□ポーズを置く個所やそれぞれのポーズの長さの変化など工夫している。
□腹式呼吸を意識し、マイクなしでも20メートル先の人に聞こえるような声の出し方をしている。
□自然なアイコンタクトを目指しながらも、要所ならではの右目線、左目線、中央目線などを考えている。
□とってつけたようなジェスチャーは避けて、あくまでも自然で大げさでないジェスチャー、身のこなしをしている。
□覚えた「つもり」はまだ危険なので、途中の段落から始めてみるなど、暗記は150%～200%完璧にする。
□口に出して練習してみて言いにくい表現や単語は思い切って修正を加えるなど、原稿の改善をいとわない。

当日本番前段階

□会場へは十分な時間の余裕をもって着くようにする。
□髪が顔にかかって表情が見えなくならないように、髪形を意識している。
□徐々に高まる緊張感は期待感の高まりとして肯定的に受け止める。
□事前のマイクテストは十分に行い、斜め下から45度の角度で口に向けるように高さを調整する。
□マイクと口の間隔は握りこぶしくらい空けて、破裂音がノイズにならないようにする。
□マイクテストではスピーチの最初の数行を実際に声に出して会場へ響く音を自分の耳で確認する。
□壇上へ向かう道筋と歩き方、発表後に席に戻る道筋と歩き方も意識しておく。

本番発表段階

□前の発表者とマイクの高さが異なる場合は慎重に調整し、口の真正面にマイクが覆いかぶさらないようにする。
□壇上で礼をした後、深呼吸をして少し間を取り、自分のスピーチの内容の空気を作って話し始める。
□Introduction で聴衆を取りこぼさないために、出だしの話す速度は特に注意する。
□会場の明るさの関係で聴衆の姿や顔が見えるなら、しっかりとアイコンタクトをする。
□会場が暗くて聴衆の顔がよく見えない場合も、見えていると想定して語りかける。
□発表の最後に唐突で不自然な調子の Thank you for listening.は避け、雰囲気を壊さない自然な Thank you.で終わる。
□名前を呼ばれて立ち上がりステージに向かう段階から発表が始まっていることを意識する。
□スピーチ自体が終わりその余韻の中で席に戻る間も自分の発表の一部であることを意識する。

本番終了後段階

□審査員と懇談の機会があればできるだけ複数の審査員に良かった点と改善できる点を聞いて確かめる。
□DVD 等で自分の発表を見る機会があれば、第三者的視点でじっくりと観察し、他の発表者と比べてみる。
□上位入賞を確信しながら果たせなかった場合は、そこまで自信を持てるほど自分を高める努力をした自分を誉める。
□結果にかかわらず他では得られない貴重な学びの意味を前向きに受け止め、次のステップにつないでいく。